

第九回 笠岡市文学賞

木山捷平文学賞は

松浦寿輝さん

『あやめ 鯨 ひかがみ』

に決定

この文学賞は、庶民的な視点から、飘逸でユーモアがあり、滋味あふれる独自の文学世界を創造し、日本文学史上に特異な地位を占める笠岡市出身の作家木山捷平の優れた業績を顕彰するとともに、文学の振興及び豊かな芸術文化の高揚を図ることを目的として、平成八年四月に笠岡市で制定しました。

松浦 寿輝
(まじゅうら ひろき)



一九五四年東京生まれ。東京大学大学院総合文化研究科教授(表象文化論・フランス文学)。詩人・作家・

映画評論家。二〇〇〇年に「花腐し」で芥川賞を受賞。詩集に、高見順賞受賞作「冬の本」、小説に「もののはむれ」「幽」「半島」など。評論に、三島由紀夫賞受賞作「折口信夫論」や「エツフェル塔試論」「知の庭園—19世紀パリの空間装置」などがある。

思い出多い故郷を描く

よみびづの言葉

「本当にうれしく思います。それ以外の言葉は出てきません。」

この作品は、上野や御徒町が舞台として登場します。これらは、私が幼少の頃に過ごした場所であり、思い出がたくさん詰まっている場所でもあります。木山捷平さんが故郷を題材に多くの作品を描いているというので、どこか通じるものがあったのかも知れません。

今回の受賞を機に、木山捷平について勉強したいと思います。」

「あやめ 鯨 ひかがみ」
あらすじ

「今からそう遠い過去でもない年の暮れの東京で、一夜のうちに起こった三つの出来事が語られている」短編集。生と死、現実と虚構、光と影。その境界に、揺らぎ、彷徨う男たちの魂の官能の感濁、背徳の喜び、退廃の甘美を、濃密な文章でつづる。文芸評論家の川村二郎氏が「熟しすぎてなお形の整いを失わぬ果実の、光沢と匂い」があると書評した作品からは、この世のむなしさと、むなししいこの世を生きる男たちの強靱なつぶやきが聞こえてくる。

